

大乘仏教における四聖諦観の一考察

——『般若灯論』観聖諦品所引の經文を中心として——

古 坂 紘 一

大乘仏典においてしばしば、四諦は声聞のために説かれたとする見方が表明される。たとえば鳩摩羅什訳の『法華經』序品において、「声聞を求むる者の為に、応ぜる四諦の法を説き、生老病死を度して涅槃を究竟せしめ」というのはその典型例である。しかし他の大乘仏典でつねに四諦をそのように位置づけているかという、必ずしもそうとは限らない。

たとえば『華嚴經』の四諦品では四諦の各諦がいろいろな単語によって言い換えられるが、そこには四諦が重要な教義として捉えられているのを見ることがができる。また『大宝積經』第二無辺莊嚴会無上陀羅尼品では四聖諦に関する大乘的説明がある。

大乘の種々の論典にも四諦に関する釈説が行われている。『大乘莊嚴經論』卷第十二では、(1) 輪転如・(2) 空相如・(3) 唯識如・(4) 依止如・(5) 邪行如・(6) 清浄如・(7) 正行如という諦仮建立七種（七如，七種真如，七種第一義諦相）のうち、(4) ～ (7) の真如は四諦であり、三乗に共通するものとしている¹⁾。この法数は既に『深密解脫經』、『解深密經』に挙げられている。

また『現觀莊嚴論』第四章第 3 偈では、因（集）と道および苦と滅の順序通りに、それらは八，七，五，また十六とも称せられる、として四諦の法数を詳しく分析している²⁾。『大乘阿毘達磨集論』等においても四諦が詳説される。

これらの瑜伽行派系統の論典およびそれらが依用した經典を見れば、四諦について大乘の立場でポジティブな把握と分析が行われていることは明らかである。

しかし同じ大乘仏教のうちでも、中觀乃至空觀系統の論典およびそれが依用した經典では、四諦についての觀察の仕方が上述の瑜伽行派の系統の論典の場合と全く異なっている。『法華經』等の場合ともまた異なっている。

『中論』第 24 章「観聖諦品」第 1 偈で、竜樹は空性に対する特殊な反対主張 (mi mthun pa'i phyogs kyi khyad par: *pratipakṣa-viśeṣa) を想定し、空性論に対する不空性・有自性性を説く部派仏教の立場から、「もしこの一切が空であるならば、生起する

こともなく、消滅することもない故に、汝にとって四聖諦は存在しない、という過誤に陥る。」と言うであろうと反論を設定した上で、第14偈において、「凡そ空性が成立する人には、一切が成立する。(sarvaṃ ca yujyate tasya śūnyatā yasya yujyate /)」と弁論する。その偈に対して『般若灯論』(Prajñāpradīpa: 以下“PP”と略称)³⁾および観誓(Avalokitaṃvratā)の『般若灯論広註』(Prajñāpradīpatīkā: 以下“PPT”と略称)⁴⁾では、部派仏教の四聖諦を解釈し、空であっても縁の集合で起こる苦等を前提として、いわゆる十六行相によって見るのが四諦であるとした上で、更に改めて大乘の四聖諦観を次のように明らかにしている。(【 】内がPPTの文、それ以外はPPの文)

【次に、大乘の理趣により四諦等がどのように成立するようになるかを示すために、】同様に、第一義において、事物の幻のような自性は生ずること無し(無生)等と見るのが聖諦を見ることである【という。そのことについて大乘によく知られた典拠を示すために、】「マンジュシュリーよ、凡そ一切法は生ずること無しと見る者、彼は苦を遍知する。凡そ一切は住すること無しと見る者、彼は集起を断ずる。凡そ一切法は畢竟涅槃であると見る者、彼は滅を証得する。マンジュシュリーよ、凡そ一切法は修すること無しと見る者、彼は道を修するのである。」と説かれた通りである。

大乘の理趣によっても聖諦は成立する。従って法と仏もすべて成立するので、一切も亦成立するのである。

という。(PP:Dg.230a1-4;Pk.288b3-7. PPT:Dg.239b4-240a1;Pk.286a3-7)

PPの場合、「凡そ空性が成立する人には、一切が成立する。」という中論偈は、空性を理解するならば、四諦すべてに関する実践が成立するという意味に解釈され、この経文が依用されていると言えよう。PPは同品末尾の第40偈の注釈にもこの経文を引用している。

さてここに引用される大乘經典は、少なくともPPにおいて大乘の四聖諦観を示す基本的な典拠として用いられているが、この章に同種の他の經典がいくつか引用され、またその周辺の經典も見いだされるので、ここにそれらの経文のいくつかの特徴について比較考察して見たい。

(1) 『文殊道行經』

波羅頗蜜多羅(Prabhā(kara)mitra)によって630-632A.D.に漢訳された『般若灯論釋』(以下“漢灯論”と略記)ではこの經の名称を「文殊道行經」と記している。曰く、

文殊道行經に説くが如し。「仏文殊師利に告ぐ。若し一切諸法の無起を見れば、即ち苦諦

を解す。若し一切諸法の無住を見れば、即ち能く集を断ず。若し一切諸法の畢竟涅槃を見れば、即ち能く滅を証す。文殊師利よ。若し一切諸法の無自体を見れば、即ち是れ道を修す。」是の義を以ての故に摩訶衍中の聖諦の道理成ずるを得。

(2) “Phags pa ye shes gsang ba bsgoms du bcug pa'i mdo”

一方この PP の注釈文について、PPT は、「大乘によく知られた典拠を示すために」言われたのであって、「phags pa ye shes gsang ba bsgoms du bcug pa'i mdo（聖知恵秘密修習に入る経）にそのように説かれている。」とする。（この名の独立した経の存否については未詳。）

(3) 『大乘善見変化文殊師利問法経』（参照）

しかしこの経文は天息災訳の『大乘善見変化文殊師利問法経』（以下『善見変化』と略称）の中の一節に酷似している。同経に、

爾の時文殊師利童子、仏に白して言く。「世尊。云何が四聖諦の心を見んや。仏文殊師利に告ぐらく。若し一切法は即ち不生なりと見れば、故に即ち苦諦を見る。若し出生する一切法は消除さると見れば、故に即ち是れ集諦なり。若し最上の涅槃は一切寂静の法相なりと見れば、即ち是れ滅諦なり。若し究竟の一切の法性を見れば即ち是れ道諦なり。（大正 XIV, p.515a）

という。

(4) “Ārya-Bodhipakṣa-nirdeśa-nāma-mahāyāna-sūtra”

『西藏大蔵経総目録』によると、その『善見変化』に対応するのは、西藏大蔵経では、東北 No.178, “phags pa byang chub kyi phyogs bstan pa” (Ārya-Bodhipakṣa-nirdeśa-nāma-mahāyāna-sūtra) である。（大谷目録 No.845 に対応）。その西藏文に、

一切の行は無生なりと見る者は苦を遍く知る。一切の法は無起なりと見る者は集を捨て。一切の法は畢竟般涅槃なりと見る者は滅を証得する。一切の法は無実体なりと見る者は道を修する。（Dg.ma241b7-242a1;Pk.bu252b2-4）

とあり、この箇所では漢訳文と概ね一致する。

(5) 「経典 A」

一方当該の灯論の一文は、羽溪了諦博士によると、安慧の『大乘中観釈論』観聖諦品より採用したものと推定されている。（『国訳一切経』中観部（二）「般若灯論」p.325n.）たしかに『大乘中観釈論』には上とほぼ同文の言及がある。

『大乘中観釈論』に、

若し大乘法中に諦理を見れば、経中の説の如し。宝跡菩薩、妙吉祥菩薩に白して言く、若し一切法無生と了すれば、是れを知苦と為す。若し一切法無住と了すれば、是れを断

集と為す。若し一切法畢竟寂滅と悟れば、是れを証滅と為す。若し一切法無性と見れば、是れを修道と為す。

とある。(高麗大藏經 No.1482, p.166a.)

しかしここには「経中の説の如し」とのみあって、経の名は示されていない。そこでこれを仮に「経典 A」と呼ぶこととするが、内容からすればこれは『善見変化』と同類の経と見るべきであろう。

なお羽溪博士は、広註に記される上記の題名について、「釈論および西蔵訳に於いては之が何れの経文たるかを示さざるも、本漢訳に於いては文殊道行経の説といひ、観誓の広疏に於いては入如来智徳不思議経(華嚴経の不思議境界分)の文なりとす。」と述べておられるが、しかし『華嚴経』(六十巻本、八十巻本)の「仏不思議法品」、さらには『大方広仏不思議仏境界分』を見る限りではこの種の四諦観は登場しないので、これを華嚴経の不思議境界分と同定することは不可能であろう。

(6) “Ārya-Maṅjuśrī-paripṛcchā”

2.3 さて『中論』同品末尾の第 40 偈に、

《縁起【の無自性性】を見る者、彼こそかの苦・集・滅・道を見る。》

(S) ya pratityasamutpādaṃ paśyatidaṃ sa paśyati /

duḥkhaṃ samudayaṃ caiva nirodhaṃ mārgam eva ca //40//

という。この偈に対する Prasannapadā の注釈において、先述の Bodhipakṣa-nirdeśa に類似した文が、二度にわたって引用されるが、Prasannapadā には経名は “Ārya-Maṅjuśrī-paripṛcchā” と記されている。一切法は不生、無住、涅槃、空と見るということにおいて、四諦の実践が成立するというのがこの経文の概ねの趣旨である⁵⁾。

(7) 「経典 B」(仮名) と (8) 「経典 C」(仮名)、(9) 「梵天所問経」

一方 PPT はこの第 40 偈に対する注釈の中で次のようにいう。

【この聖諦 (について) 経典 (仮に「経典 B」と名付ける) に、「マンジュシュリーよ、凡そ一切法は無生であると見る者は苦を遍知する。凡そ一切は住すること無しと見る者、彼は集起を断ずる。凡そ一切法は畢竟涅槃であると見る者、彼は滅を証得する。マンジュシュリーよ、凡そ一切法は修すること無しと見る者、彼は道を修するのである。」と説かれたことと。】

といい、更に続けて、

【又同様に、(経典 C—仮名—) 世尊が「マンジュシュリーよ、もし苦を見るのが諦で

あることになるのなら、地獄の有情も亦諦を見るであろう。即ち彼らも『お、苦しい、お、苦しい』と分別するからである」と説かれたことと、又同様に（梵天所問經に）「ブラフマンよ、そのようにしてまた汝は次のように知るべきである。苦と集と滅と道は聖者達の諦ではないが、苦の無生と、集の無集起と、常に寂滅している一切法における究竟滅と、平等なる一切法を無二として道を修すること、それが聖者達の諦であると知るべきである。」と説かれたことなどによって、苦等をどのように見るならば（それが）諦を見ることであるか、と観察すべきである。】

という。（Dg.247b3-248a1;Pk.295a2-b1）

ここには仮に「經典 B」、「經典 C」と名付けた經文と「梵天所問經」の3つの經文が続けて引用されている。「梵天所問經」という名称は PP と PPT には無いが、漢灯論で『梵王所問經』と記しているところに当るので、それを借りて表示したが、しかし經典 C は、經典 B に類するのではなく、「梵天所問經」に属する經文である。（但し漢灯論には「經典 B」、「經典 C」は訳されていない。）

〔10〕『勝思惟梵天所問經』（参照）

ここにいう「梵天所問經」（漢灯論：『梵王所問經』）の文は元魏菩提流支訳の『勝思惟梵天所問經』（以下『勝思惟』と略称）の一節に近似している。しかもこの部分が無著の『順中論』に引用されていることは注目に値する。

梵天よ、若し彼の苦はれ実の聖諦ならば、一切牛猪（『順中論』では猪）の諸畜生等は応に実の諦を有すべし。何を以ての故に、彼皆種種の苦を受くるを以ての故に、是の義を以ての故に苦は実の諦に非ず。梵天よ、若し彼の集はれ実の聖諦ならば、六道衆生は応に実の諦を有すべし。何を以ての故に、彼集に因りて諸趣を生ずるを以ての故に、是の義を以ての故に集は実の諦に非ず。梵天よ、若し彼の滅はれ実の聖諦ならば、一切世間の邪に墮する断見もて滅法を説く者は応に実の諦を有すべし。何を以ての故に、彼滅法を説いて涅槃と爲すが故に、是の義を以ての故に滅は実の諦に非ず。梵天よ、若し彼の道はれ実の聖諦ならば、一切の有為道に縁る者は応に実の諦を有すべし。何を以ての故に、彼有為法に依りて、有為法を離ることを求むるを以ての故に、是の義を以ての故に道は実の諦に非ず。梵天よ、是の故に当に知るべし、苦諦集諦滅諦道諦は実の聖諦に非ず。梵天よ、実の聖諦とは、苦は無生なりと知る。是れを苦実聖諦と名づく。集は無和合なりと知る。是れを集実聖諦と名づく。畢竟滅法中に於いて無生無滅なりと知る。是れを滅実聖諦と名づく。一切法平等に於いて不二法を以て得道す。是れを道実聖諦と名づく。

という。（大正 No.587,XV,p.69a. 下線部は無著の『順中論』に引用）

「梵天所問經」類では、もし苦が聖諦であるとすれば畜生あるいは地獄にも四

諦があることになる、と指摘するが、そのような文は『善見変化』類には見られない。これらの対比によって、先述の經典 B は『善見変化』と同じであるのに対し、經典 C と「梵天所問經」はともに『勝思惟』の部分であると考えられる。なおこの經は竺法護訳の『持心梵天所問經』、鳩摩羅什訳の『思益梵天所問經』(『思益經』)の異訳であり、『網明菩薩經』あるいは『梵問經』等種々の名前で『大智度論』、『大乘掌珍論』など多くの論典に引用されていることは、既に五島清隆氏「『梵天所問經』解題」(『密教文化』第 161 号)において指摘されている。

清弁や月称に先立ち、瑜伽行派の無著と安慧による『中論』の注釈で、このような經典が依用されていたことになるが、これらの經典の文は無著や安慧が空觀の立場にシフトした場合に四諦の説明方式として用いたものと考えられる。

いずれにしろ、上述のように対比して見ると、

- (1) 『文殊道行經』(漢灯論記名、所引) から
- (2) 'phags pa ye shes gsang ba bsgoms du bcug pa'i mdo (広註記名、所引)
- (3) 『仏說大乘善見變化文殊師利問法經』(『善見変化』)
- (4) Ārya-Bodhipakṣa-paripṛcchā
- (5) 經典 A (『大乘中觀釈論』所引)
- (6) Ārya-Mañjuśrī-paripṛcchā (Prasannapadā 所引)
- (7) 經典 B (40 偈漢灯論所引)
- (8) 梵天所問經 (40 偈漢灯論所引)
- (9) 『勝思惟梵天所問經』(『勝思惟』)

までの間で、内容的には微妙な差異が見られるものの、ほぼ同じ趣旨の空觀的大乗の四聖諦が述べられていることがわかる。

もっとも、道諦の内容に関する表現が微妙に異なっているかに見える。しかし要約して言えば、空の觀察そのものが真の道諦であるというのがそれらの經の趣旨である。それは道諦としての八正道の根本たる正見は空を觀察することであるという立場を表明したものであったと言えよう。

そこでは、苦集滅道自体ではなく、苦集滅道のそれぞれを空と知ることが真の四諦であるとする立場ををふまえ、一切は空であるという第一義諦の次元で四諦全体を要約している。さらに言い換えれば、一切は畢竟涅槃であると見て滅諦を証得する次元に他の三諦に関する知・断・修の実践を還元し、四諦全体を包括するのが大乘の空觀の立場であったとも言えよう。

ところで、『中論』第 24 章第 8 偈において、「諸仏の説法は、二諦に依っている。

世俗諦と第一義諦である。」という二諦説が論じられるが、広註では第一義諦を「第一義的第一義諦」と「標識として施設された第一義諦」とに二分して、後者についてつぎのように述べている。

（PPT）【次に標識として施設された第一義諦（sāṃketika-paramārtha-satya）の特相を説く。それは、(i) 第一義を対象とする無分別知と、(ii) それを否定する教説、及び (iii) 知恵（般若）として述べられる。】（中略）

（PP）それを否定することと一致する無生等の教説、及び聞・思・修所成の智慧（般若）も亦第一義である。何故なら（それらは）第一義を理解する方便として正しい故に、という。「それを否定する」の「それ」とは、対象化された無分別知を指している。したがってここに大乘の四諦を明らかにするために引用された『大乘善見變化文殊師利問法經』と『勝思惟梵天所問經』に類する經文の説は、まさしくこのような無生等を説く否定的教説に当り、觀誓の言葉で言えば、「標識としての第一義諦」に相当すると考えられる。

1) 大正 31,p.653a.

2) Unrai Wogihara ed., *Abhisamayālaṃkāra' āloka Prajñāpāramitāvyākhyā The Work of Haribhadra*, Sankibo 1973, p.452.

3) 東北 No.3853; 大谷 No.5253, Jñānagarbha, Klu'i rgyal mtshan 訳.

4) 東北 No.3859; 大谷 No.5259, Jñānagarbha, Klu'i rgyal mtshan 訳.

5) この經は『大乘善見變化文殊師利問法』と同類であるが、僧伽婆羅訳の『文殊師利問經』（大正 No.468）とは異なる。

ここに Poussin 本 *Prasannapadā* (p.516) の引用文を掲げる。（同 p.517 との異同は省略する。）

Yathoktam Ārya-Maṇjuśrī-paripṛcchyaṃ yena Maṇjuśrīr anutpāda sarvadharmāṇāṃ dṛṣṭas tena duḥkhaṃ parijñātaṃ / yena nāstitā sarvadharmāṇāṃ dṛṣṭā tasya samudaya prahīṇaḥ / yenātyanta-parinirvṛtāḥ sarvadharmā dṛṣṭās tena nirodhaḥ sāṅgāt kṛtaḥ / yena Maṇjuśrīr abhāvaḥ sarvadharmāṇāṃ dṛṣṭas tena mārgo bhāvitaḥ iti vistarāḥ /

となっている。（*PRASANNAPADĀ Commentaire de CANDRAKĪRTI*, Publiée par Louis de la Vallée Poussin, 1903-1913 (Osnabgück 1970), p.516,517）

〈キーワード〉 四聖諦, 大乘, 經典, 『般若灯論』, 空, 無生

（大阪教育大学名誉教授, 文修）

ements (*dhammā*), He realizes the Law (*dhamma*, Truth) which accompanies the causes and conditions of human existence and He knows the cessation of these causes and conditions as well. These elements (*dhammā*) may mean the elements (*aṅga*) of dependent origination, or 5 aggregates and 6 (or 12) spheres of perception and cognition, etc., which exist when the causes and conditions exist, and which cease to exist when these causes and conditions cease to exist, according to the Law of dependent origination.

68. Views on the Four Noble Truths in Mahāyāna Buddhism: Sūtra texts quoted in the Āryasatya-parīkṣā Chapter of the *Prajñāpradīpa*

Kōichi FURUSAKA

On the 24th Chapter of the *Mūlamadhyamaka-kārikā*, the *Prajñāpradīpa* of Bhā(va)viveka quotes a sūtra with regard to the Four Noble Truths.

The sūtra states, “Mañjuśrī, whoever sees that all things (dharmas) do not arise knows thoroughly Affliction. Whoever sees that all things do not stop abandons the Origin (of Affliction). Whoever sees that all things are Nirvāṇa in the end realizes the Appeasement. Mañjuśrī, whoever sees that all things have no effecting effects the Way.”

In regard of this sūtra, the *Prajñāpradīpaṭīkā* of Avalokitavrata comments that the sūtra is quoted in order to give the authority which is well known in Mahāyāna, and such a view is expounded in the '*Phags pa ye shes gsang ba bsgoms du bcug pa'i mdo*.

That sūtra text nearly coincides with the *Arya-mañjuśrī-paripṛcchā* quoted in the *Prasannapadā*. But those texts are also found in some sūtras of the same class, such as the *Bodhipakṣanirdeśa* (T. 472) and *Viśeṣacintibrahmaparipṛcchā* (T. 587).

The views on the Four Noble Truths of these sūtras correspond to the Sāṃketika-paramārtha-satya.

69. On *Nirvikalpa* in the *Abhidharma Mahāvibhāṣā*

Hidekazu MAEDA